

[平成20年度参考となる技術]

[技術名] 坂井北部丘陵遊休地への若狭牛放牧技術

[要約] クズが繁茂する遊休地の若狭牛（1頭）の放牧可能日数は、1区画40aでは116日、20aの2区画では148日であり仕切ると1ヶ月長くなる。初年利用後に牧草を播種し放牧利用すると、放牧期間は野草地よりも約3ヶ月長く放牧できる。

[キーワード] 坂井北部丘陵地、遊休地、放牧、牧養力

[担当] 福井畜試・技術開発部・資源活用研究グループ

[連絡先] 電話 0776-81-3130 電子メール chikusi@pref.fukui.lg.jp

---

[背景・ねらい] 遊休地への放牧は、肉用牛繁殖経営農家にとって飼料費の節減、管理労力の省力化および飼養規模の拡大につながるなどメリットがある。そこで坂井北部丘陵地の遊休農地を活用して、小規模な土地(1区画40a)での効率的な放牧方法について検討する。

[技術の内容・特徴]

1. 遊休地の植生はクズが優先繁茂し、セイタカアワダチソウ、ヘビイチゴ、ヤブカラシ、ハルガヤ等である。
2. 若狭牛1頭当たりの放牧可能日数は1区画40aの連続利用で116日、20aの2区画の輪換利用では148日であり、輪換利用すると1ヶ月長い(表1)。2年目の放牧可能日数は初年目に比べて6~7割に低下する。
3. 牧草の播種方法別放牧日数はペレット播種、耕起播種それぞれ166日、182日で耕起播種の方がやや長い。また、牧草の播種により野草地(2年目)の約2倍まで放牧期間を長くすることができる(表1、2)。
4. 野草地への入牧時の草量( $x$ :乾物  $g/m^2$ )と、牧養力( $y$ :CD/ha)には、 $y = 0.7647x$ 、( $p < 0.01$ )の関係がある(図1)。

[技術の活用面・留意点]

1. 放牧に必要な電気柵(2段張り)、給水器および集合柵を設置するとともに、放牧牛は事前に放牧馴致とワクチン接種等を行う必要がある。
2. 遊休地の野草を利用して放牧すると、2年目以降は草量が低下するので、シードペレット等により牧草を播種する必要がある。

[具体的データ]

表1 クズ優先野草地の放牧可能日数

		輪換放牧 (20a × 2区)		連続放牧 (40a)	
		初年目	2年目	初年目	2年目
1頭あたり 放牧日数	1巡目	34	56	34	72
	2巡目	68	28	56	4
	3巡目	46	10	26	8
	合計	148	94	116	84
牧養力 (CD/ha) (注)		370	235	290	210
5ヶ月間に必要な1頭当 たりの面積(a)		41	64	52	72

(注) 牧養力とは、1頭1haあたりに換算した放牧可能日数

表2 牧草の播種方法と放牧可能日数

		ペレット播種 (40a)	耕起播種 (40a)
1頭あたり 放牧日数	1巡目	18	126
	2巡目	98	26
	3巡目	34	22
	4巡目	16	8
	合計	166	182
牧養力 (CD/ha)		415	455
5ヶ月間に必要な1頭 当たりの面積(a)		36	33

ペレット播種は、肥料を固形化し種子を付着後播種。イ列ア2.5kg/10a, N8kg/10a  
耕起播種は、イ列ア2.3kg/10a播種。N8kg/10a施肥。

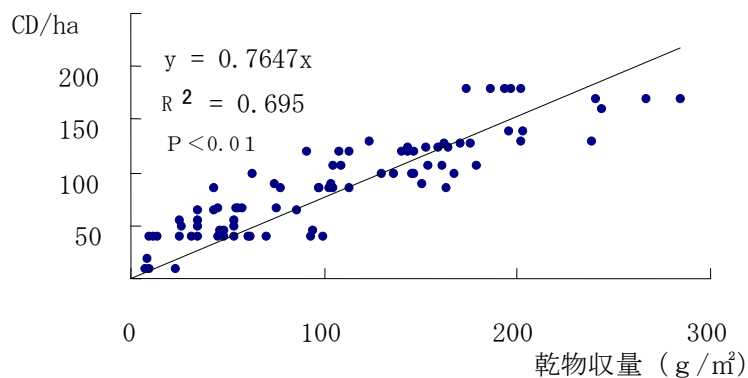


図1 草量と牧養力との関係

[その他]

研究課題名：遊休地利用による放牧管理技術の確立

研究期間：2006～2007年度

研究担当者：小島孝夫、村田文彦ほか